

# ブルデューの社会学的遺産の継承可能性について

——ベルナル・ライールの批判的展開——

東京都市大学 村井重樹

## 1 目的

本報告は、フランスの社会学者ベルナル・ライール (Bernard Lahire) が展開する社会学的研究を考察の基点とし、ブルデューの社会学的遺産をいかにして継承し、発展できるのかについて、その理論的・方法論的可能性を探究することを目的とする。

## 2 方法

ライールは、彼の初期の研究において、ブルデューが円滑になされるものと想定していた家族内におけるハビトゥスないし文化資本の伝達プロセスを、移民家族へのインタビュー調査によって再検証し、そこに複雑かつ多様な形態が存在することを経験的に明らかにした (Lahire 1995)。この研究にもとづいて、ライールは、ブルデューが社会階級との一義的な対応関係によって集合的かつ均質的に把握する傾向をもつハビトゥス概念を問題含みのものとみなすようになる。そして、集合レベルから個人レベルへと、考察の視座を転換することによって、諸個人が織りなす相互依存関係 (フィギュレーション) から生成する複数的・多元的な諸性向のシステムとして、ハビトゥス概念の捉え直しを図る (Lahire 1998)。この見方を通じてライールは、ブルデューが前提とする社会階級に固有の均質的・統一的ハビトゥスを身体化した「単数的人間」を解体し、多元性や矛盾を宿した「複数的人間」を実践把握の中心に位置づけることを提起するのである。こうしてライールは、みずからの研究対象と問題意識の大部分をブルデューと共有しながらも、この社会学的行為者像を媒介として、さまざまな角度からブルデュー社会学の諸概念 (とりわけ、ハビトゥスと場の概念) とその方法を批判的に検討していく。

## 3 考察

本報告は、上述のライールによるハビトゥス概念の修正を踏まえたうえで、主に文化的実践の分析に際し、ブルデューの場 (champ) の概念にいかなる問題が析出されるのかについて考察する。ブルデューによれば、歴史的・社会的に分化し自律化した場は、各々に固有の賭け金をもち、そこに参入する諸行為者は、場の境界の内部でその賭け金をめぐる闘争を繰り広げ、力関係の保持あるいは転覆を図っている。しかしながら、ライールにしたがえば、場の概念には、資本の豊富な支配者層に対する分析の偏重や、各々の場の相互の関係性など、高度な自律性を前提することに付随するいくつかの問題が存在する。こうしたライールのブルデュー批判は、場の概念が均質的・統一的なハビトゥス概念と対を成し、その両者の密接な結びつきを通じて実践を分析するものであったことから当然であるといえよう。ここでは、場の概念に対する批判を中心にライール社会学を考察することで、ブルデュー社会学の批判的継承を通じたいかなる研究プログラムが新たに可能となるかを探求したい (Lahire 2012)。

## 文献

Lahire, 1995, *Tableaux de famille*, Seuil/Gallimard.

——, 1998, *L'Homme pluriel*, Nathan.

——, 2012, *Monde pluriel*, Seuil.